九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『追想　具島兼三郎』刊行委員会編『追想　具島兼三郎ー良心を枉げて易きにつく者は悔いを千載に残すー』

後藤, 啓倫
九州大学大学院法学府修士課程

https://doi.org/10.15017/16456

出版情報：政治研究. 54, pp.180-182, 2007-03-31. 九州大学法学部政治研究室
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

に、空爆による犠牲者の発生も容認するというように形を変えて生き続けている、無差別攻撃を許容する論理の問題性を論じている。原爆投下に関して、特に、意外と見落とされがちな「広島の後に続く長崎」に着目することによって、しばしば言われる正当化論理の破綻を指摘している点は止目すべきところであろう。終章においては、今日の東アジアにおける冷戦構造とNPT（核不拡散）体制に言及しながら、「非核証明書」を持たない艦船の入港を拒否する「非核神戸方式」や無防備宣言都市運動といった例を挙げ、戦争の危機に対して「平和の選択」をなす一人一人の取り組みの重要性と可能性を指摘し、章を結んでいる。

この第二部、第三部を通じて、九・一一以後、さかんに振り翳される「平和のための戦争」という言葉の持つ矛盾とその文脈において等閑視されている多くの問題を浮き彫りにしている。

本書の最後では、著者の継続的な平和教育の実践・体験の歩みが、特別編という形でまとめられている。特に、後半部は「実践編」ともいうべきものである。「平和をめぐる旅」と題された論稿では、中国、韓国、ヴェトナム、アメリカそしてピースボートにおける交流がまとめられている。続いて、著者が主宰している平和問題ゼミナールの活動の紹介および概略に触れた論稿が並んでいる。平和学が、平和研究・平和教育・平和運動という三位一体であるべきとする筆者の姿勢は、この「実践編」において殊に見ることができる。

全体を通して、本書は、現在に大きな影響を与えている冷戦という時代とその構造を読み解きながら、九・一一からアフガン戦争、イラク戦争へと、次第に軍事の論理が強化され、突出していく傾向とその正当化論理に対して批判的に切り込んでいる。個別の章あるいは各部は、単に機能的というよりも、著者の平和学的関心によって結び付けられているが、本書を通じて、著者の平和学に対する真率な思いが伝わってくる。

（渡邉智明）

『追想　具島兼三郎』刊行委員会編

『追想　具島兼三郎――良心を枉げて易きにつく者は悔いを千載に残す――』

（弦書房、二〇〇六年、二〇四頁）

本書は、故具島兼三郎九州大学名誉教授への追悼文集である。

本書の構成は、I～V部からなる。まず「I　没後一年を

記念するシンポジウム」では、二〇〇五年十一月六日に開催された「没後一年を記念するつどい」の第一部「記念シンポジウム—先生の人間・学問・実践」における「開会の挨拶」、「パネラーの発言」、「フロアからの発言」、「コーディネーターのまとめ」が収録されている。

「パネラーの発言」においては、人間・学問・実践の三つの観点からの具島像が描かれている。「人間—具島兼三郎」（小沼新＊敬称略、以下同じ）では、幼年時代から具島先生のご家族と過ごしてきた報告者の視点から先生の人柄が語られている。「学問—具島『上からのファシズム』論の再検討」（熊野直樹）では、戦前期具島ファシズム論の再検討がなされ、その学問的諸特徴と現代的意義について明らかにされている。「実践—社会変革の力を育てつづけて」（佐藤大助）では、具島先生の社会教育活動が分析されている。「フロアからの発言」においては、五名の発言者による具島先生についての報告が紹介されている。「理論と実践の統一」（安部博純）では、理論と実践の統一を果した具島先生が紹介されている。「二人の師匠」（池田真規）では、具島先生について、風早八十二先生と重ねながら語られている。「奥田県政の誕生」（衣笠哲生）では、一九八三年の奥田八二福岡県知事の誕生と具島先生の関係が明らかにされている。「先生と『ながさき放送セミナー』」（藤田富子）では、「ながさき放送セミナー」における具島先生が紹介されている。「先生に学ぶこと」（溝口宏敏）では、具島先生の生き方が紹介され、今日におけるその重要性が指摘されている。以上を通じて、「記念シンポジウム—先生の人間・学問・実践」での様子を知ることができる。

「II　先生を語る」では、大学関係者、門下生、教え子、市民から寄せられた二十四本の追悼文が紹介されている。ここでは、紙幅の関係上、寄稿者名とタイトルのみを掲げる。

「先生へのオマージュ」（柴田高好）／「追想二つ」（山田浩）／「剛毅朴訥の人」（徳本正彦）／「九大政治学の伝統を築いた人」（今中比呂志）／「批判的知性のすすめ」（毛利敏彦）／「教えられっぱなしの私」（木下威）／「先生を偲んで」（石村善治）／「始めての学外・文系学長に就任されるまで」（大橋裕）／「先生こそわが師」（山本司）／「私の見た先生」（鍵山芳子）／「含蓄ある言葉」（川原竹一）／「謙虚な姿勢に感服」（楠祐次）／「先生と母」（村上聖）／「昭和史を学ぶ会から」（奥田正）／「二つの時代を生きる」（木村晃郎）／「良心を枉げて易きにつく者は悔いを千載に残す」（林満直）／「青春の追憶に宿る先生の面影」（清水昭俊）／「先生の温かさ」（岩本桂）／「博多っ子・具島先生」（角田肇）／「思い出あれこれ」（原田正之）／「不撓不屈の人」（内田敬二）／「先

生に見守られて」（池永満）／「老いて学べば即ち死して朽ちず」（宮下和裕）／「日ソ協会のころ」（飯田富士雄）

以上を通じて、具島先生がいかに多くの方々から敬愛されていたかを理解できよう。

「Ⅲ　追悼のつどい」においては、二〇〇四年十二月十八日に執り行われた「追悼のつどい」が、再現されている。「先生晩年の状況について」（徳本正彦）では、具島先生の晩年、とりわけ先生が入院された二〇〇四年四月十七日から亡くなられた十一月十二日までの詳細な病状が報告されている。続く「弔辞」では、「追悼の辞」（谷川榮彦）、「追悼の言葉」（内田一郎）、「追悼　具島兼三郎先生」（鎌田信子）、「お別れの言葉」（江崎政子）が収録されている。「追悼のつどいに寄せられた葉書から」では、次の三十三名の方々による具島先生を偲ぶ言葉が紹介されている。

北西充、吉村徳重、鈴木広、大屋祐雪、原島重義、土山秀夫、犬丸義一、嶋崎譲、田中義孝、中楯興、古賀昭典、犬童一男、蔦川正義、久永大、井田輝敏、近藤嘉昭、鈴木真幸、日塚是利、水崎由葵子、濱方鉄雄、永田択一、小崎重、靏内孝之、中屋敷宏、関家敏正、岩間泉、神山泰二、三原譲、梅津明治郎、山本義人、水崎節文、新原昭治、黒木彬文

「Ⅳ　父・祖父・伯父の想い出」においては、子供、孫、姪の目からみた具島先生が描かれている。「父の素顔」（白岩美知子）では、家庭内においても男女平等を実践していた具島先生を知ることができる。「父のこと」（加宮葵）では、具島先生の教育が語られている。「心に残る言葉」（白岩千鶴子）と「祖父との思い出」（照屋麻衣子）とでは、孫を愛する具島先生が描かれている。「仲のよかった伯父と父」（具島彩子）では、具島先生とご兄弟について述べられている。「アルバムから」では、学生時代から晩年までの具島先生の写真が収められている。以上を通じて、具島先生の家庭内での様子を窺い知ることができる。

「Ⅴ　年譜・主要著作目録」においては、具島先生の年譜、主要著作目録、解題が掲載されている。目録を見ると先生の著作が、約三百点におよぶことがわかる。「解題」（西貴倫）では、具島先生の著作を五つの時代に分け、それぞれの諸特徴が明らかにされている。

本書を通じて、具島先生の人物像が浮きぼりにされる。と同時に、そこでは先生の学問的特徴とその現代的意義もまた検討されている。その意味で、本書は具島先生の学問的特徴に関心を抱く読者にも有益であるといえよう。本書を踏まえたうえでの、活発な具島兼三郎研究が展開されることを期待する。

（後藤啓倫）